Tales of Vesperia　短編集

ransu521

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔａｌｅｓ　ｏｆ　Ｖｅｓｐｅｒｉａ　短編集

【Ｎコード】
Ｎ０５８６Ｉ

【作者名】
ｒａｎｓｕ５２１

【あらすじ】
今小説は、テイルズオブヴェスペリアの登場キャラによる、短編連作物語。スキットからシリアスな話まで、様々な話が待ち受けております。（更新は月・水・金・土・日の五回の予定。火・木も出来れば更新、また、更新予定日に更新できない時もある）。

小説の紹介的な何か

ユーリ「……おい」

何です？

ユーリ「どうして俺達はここにいるんだ？」

カロル「そうだよ！何でまたいきなりこんな小説の登場キャラになっちゃってるのさ！」

いきなりのメタ発言、ありがとうございます。

何を隠そう、今小説――その名も『Ｔａｌｅｓ　ｏｆ　Ｖｅｓｐｅｒｉａ　短編集』という冠をかぶった小説の連載が、今回よりスタートとなったのです！！

リタ「何よ、その突っ込みどころ満載のコメントは」

どこに突っ込みどころがあった？

ジュディス「さぁ？あなたのその突拍子の行動にじゃないかしら？」

さ、さり気に辛いこと言いますな……。

冗談、ですよね？

ジュディス「あら、私、冗談は嫌いよ」

なん……だと。

エステル「それで、この小説って一体、何なんです？」

はいはい。
そんな質問が流れると思ってた所でした。
それでは質問にお答えいたしましょう。
まず、この小説は、タイトル通りの短編集です。
いくつもの短編が掲載されていくという形になります。

レイヴン「ふ～ん」

そして次に、シチュエーション等はその時その時によって違います。
例えば……『ユリリタ』『ユリエス』『ユリジュディ』系統のものから、『スキット的文章』
『ユーリ単独』と言ったものまで、様々です。

ラピード「ワン！」
ユーリ「ん？単独系の小説もあったのかって？」

おっしゃる通りで。

レイヴン「で、結構重大だと思う所があるのよね」
リタ「何よ？おっさん」
レイヴン「この小説は、どちら基準なの？」

どちらと言いますと、箱○版かＰＳ３版かの違いのことですね？

レイヴン「その通り」

今小説は、ＰＳ３版準拠で参りたいと思います。
……ていうか、作者的にはどちらも持ってないので、どっちでもよかったんだよね。

ユーリ「だから、キャラ多い方選んだってわけか」

そのとおり！

パティ「だから、うちの出番もあるということなのじゃ」
カロル「あ、パティだ」
ユーリ「でもよ、某動画サイトでの実況プレイ動画でも、最後までやってないっていうのに、
小説書いちゃって大丈夫か？」

大丈夫でしょう。
何故なら、この小説は原作設定を少し取り入れただけの、完全オリジナルストーリーだから。

リタ「それ、いつか絶対に打ち切り状態になるわよ？」

う、うるさいな！！
ちゃんとやりきるっての！！

ジュディス「ま、あなたが書いてくれないと、私達の出番がなくなっちゃうわけだから」
レイヴン「最後まで頑張って頂戴よ」

分かってますって。
ネタは充分に……あるのか？

ユーリ「おいおい……」

とにかく、この小説をよろしくね。

次回より、本編の方に参りますので。

ユーリ「それじゃあ……」

全員「また本編で！！」

怪我　前編（前書き）

ようやっと始まりました、『Ｔａｌｅｓ　ｏｆ　Ｖｅｓｐｅｒｉａ
短編集』。
第一話は、前編と後編に分かれた話となっております。

怪我　前編

ある日の戦闘でのことだった。

「穢れなき汝の清浄を……」

「あ、危ない！リタ！！」

「え？」

戦闘中のリタに襲い掛かる、一体の魔物。
それに気づいたエステルがリタにそう言うが、遅かった。
後もう少しで、リタは大きなダメージを受けてしまうだろう。
だが、そんな時だった。

「ちっ！」

（サッ）

「え？」

魔物とリタの間に入る、ひとつの影。
それは、紛れもなくユーリのものだった。

（ザシュッ）

「くっ！蒼波刃！！」

リタをかばいつつ、ユーリは魔物を撃退する。
だが、その代償は結構大きかった。
「ゆ、ユーリ！！」
まず最初に、カロルが驚きの声をあげる。
「あらあら……これはまた、派手にやっちゃったわね」
次にジュディスが、あまり慌てた様子もなく、落ち着いた感じでそう言った。
「い、今回復を……」
そう言って、エステルはユーリにファーストエイドをかける。
それでも、応急処置程のものであった。
「ば、馬鹿じゃないのアンタ！あたしなんかをかばったせいで……」
リタが、怒ったようにユーリのことを責める。
すると、ユーリは言った。
「仲間であるお前だから、守ってやったんだよ」
「！！」
瞬間。
リタの顔は赤く染まっていく。
「お？リタっちの顔がみるみる内に赤くなってってる」

「う、うっさい！！」

（ボン！）

「げふっ！」

レイヴンに茶化されたリタは、その身体にファイアボールを打ち込まれていた。

「そんなことよりも、今はユーリなのじゃ！」

「ワン！」

パティの声にあわせて、ラピードも吠える。

ちなみに、今のラピードの言葉を訳すと、『そうだ！』的な言葉だ。

「この辺の街で宿に入るのが一番ね」

「と、とにかく、すぐに宿に行きましょう！」

エステルが慌てるように言う。

そうして一同は、近くの街に向かって行った。

（トントン）

「ん？」

ドアをノックする音で目覚めた。
俺は、一体何を……。

「入るわよ？」
「ああ」

この声は、ジュディか？
……そうか、さっきの戦闘で、俺はリタをかばって、それで……。

（ガチャッ）

「もう起きてて大丈夫なのかしら？」
「ああ。エステルが治癒術かけてくれたからな」
「そう……これ、今日の夕食よ」

（カチャッ）

そう言ってジュディが渡してくれたもの。
それは……。

「……お粥？」
「そうよ。何か文句でもあるかしら？」
「いや、別にねぇけどよ」

一応病人だからな。
作ってくれただけありがたいってもんだ。
……誰が作ったのかは知らないが。

「……ところでジュディ」
「どうしたのかしら？」
「食べようにも、どうやって食べればいいんだ？」

箸もなければ、掬うやつもない。
どうしろってんだよ……。

「あら。なら、私が食べさせてあげようかしら？」
「遠慮しとく」
「あら残念」

ちっとも残念っぽさが伝わらない所から、これは冗談だったんだと感じる。

「とりあえず食事はここに置いとくわね」
「ああ、ありがとよ、ジュディ」
「礼ならあの子に言った方がいいわよ？」

「あの子？……これ、ジュディが作ったんじゃないのか？」
「ええそうよ。これを作ったのは、あなたのことを想ってる、お姫様よ」
お姫様……エステルのことか。
「それじゃあね」
（バタン）
「……さて、食べるか」
ジュディがいなくなった所で、俺はお粥に手をつける。
「……ふむ。うまいな」
そのお粥は、とても優しい味がした……ような気がした。

怪我　後編

「あたしがあの時……ミスったりしなかったら、ユーリは……」
「あら。ユーリのことを気にかけてるのね、リタは」
「ち、違っ！そんなんじゃ……！！」

い、いきなりジュディスったらなんてこと言いだすのよ！！
け、決してあたしは、そんなんじゃ……。

「そうなんです？リタ」
「違うわよ、エステル！そんなんじゃ……」
「リタ姐、顔がゆでダコのように真っ赤なのじゃ」

ぱ、パティまで何言ってるのよ！！
べべべべ、別にそんなわけ……。

「そうやって取り繕う所が、余計に怪しいわね」
「な！アンタにそんなこと言われる筋合いはないわよ！！」
「でも、まさかリタもだなんて……」
「だから違うって！！」

エステルがユーリ好きなのは分かってるわよ！
けど、あたしがユーリのこと好きだなんて……。

「うちはユーリのことが大好きなのじゃ」
「い、いきなりのカミングアウトね……」
「いくらリタ姐がユーリのことが好きでも、これだけは譲れないのじゃ」
「だーかーら！あたしはそんなんじゃないって！！」

その時だった。

（ガチャッ）

「おお、エステル。ここにいたのか」
「あれ？ユーリ！もう起きてて大丈夫なんです？」
「ああ。おかげ様でな」

ユーリが部屋の中に入って来た。

「治癒術とお粥。サンキューな」
「い、いいえ……このくらいのことしかできませんから」
「いや、それだけで十分だ」

（ズキッ）

……あれ、何だろう？
この胸の痛みは。
別に、エステルとユーリがこういう風な会話をしている風景を見たって、何とも思わないはずなのに……。

あのリタ姐の顔……。
自らの恋心に気づき始めている証拠じゃな。
なら、リタ姐がその心に気づくのももう少しじゃな。
……でも、それじゃあつまらんのぉ。
何故なら、うちもユーリのことが……。

「ん？どうしたパティにリタ？浮かない顔をしてるぞ？」

ユーリがうちらの様子が少し変なことに気づいたみたいじゃな。

「べ、別にあたしは、浮かない顔なんてしてない……」
「あら、可愛いのね」
「う、うっさい！！」

あ、リタ姐が叫び始めた。

「んで、パティはどうしたんだ？そんなに浮かない顔を浮かべちまって……もしかして、俺が
怪我したもんだから、心配でもしたか？」
「当たり前なのじゃ」
「え……まぁ、それもそうか」

多分、そう言う風に返されるとは思ってなかったんじゃな。
ユーリの顔に、若干の戸惑いの色が見え始めたのじゃ。

「ま、それじゃあ俺は部屋に戻ってるわ。んじゃ、しばらく俺は寝るから」

（バタン）

それだけを言うと、ユーリは部屋から出て行ってしまったのじゃ。

ユーリが部屋から出て行ったあと、四人の間には会話と言う会話が流れてこなかった。
別に深い理由があるわけではないのだが、ただ、何となく話しづらい雰囲気が流れていた。

最初に口を開いたのは、ジュディスだった。

「彼、元気そうで何よりよね」

「そ、そうね……心配するまでも、なかった、わね」

「リタ、そう言ってる割には、顔赤いですよ？」

エステルがリタにそう問いかけると、リタは途端に顔を赤くする。

「そそそそ、そんなことないわよ！！」

「それにしてもユーリ、さっきの戦闘のことなどもうどうでもいいほどに元気になってたの～」

「そうね。案外、体が丈夫なのかもしれないわね」

ジュディスが、まるで世間話のようにそう言った。

「ところで、パティの言ってたことだけど……」

「ああ。うちはユーリに一目惚れしたのじゃ。前にも言った覚えはあるがの」

「あら。私は初めて聞くわよ？パティがユーリに惚れていたことは知ってたけど、一目惚れ
　までは聞いてなかったわ」

そのことをカミングアウトした時、ジュディスはまだいなかったから当然と言えば当然だろう。

「なら、負けるわけにはいかないわね」

「え？」

「だって、私だってユーリのこと、気にしてるもの」

「「なっ！？」」

重なるのは、リタとエステルの二人分。

「わ、私だって、ユーリのこと……」

「……」

黙りこんでしまうリタと、大胆発言をするエステル。

「あら。なら私達はライバルね」

「そうなのじゃ。うちらはユーリをめぐるライバル同士なのじゃ」

「な、何言ってるのよアンタ達は……馬鹿っぽい」

リタがそっぽを向きつつ、そう言った。

「そういうわけじゃから、これからもよろしくな、リタ姐」

「何で私に話を振るのよ！！」

その日のリタの叫び声は、宿中に響き渡ったらしい。

『怪我』　完

怪我　後編（後書き）

おまけスキット

ユ「何か隣の部屋がうるさいな」

カ「そうだね。何か、リタの叫び声も聞こえたし」

ユ「何かあったのか？」

レ「いや、青年には関係ない話よ」

ユ「何でおっさんはそんなに嬉しそうなんだよ」

以上です。
何だか微妙な落ちのまま終わってしまいましたが、『怪我』編は終わりです。
次回は、『素直になれない少女』というタイトルで参りたいと思います。
それではごきげんよう。

素直になれない少女　前編（前書き）

今回の話も、前編後編に分かれています。

素直になれない少女　前編

旅を続けるユーリ達一向。
その途中で寄った街にて、ユーリ達はしばしの休憩を取ることとなった。
なので、その時間を自由行動とした。
フレンとパティは、本日の買い物当番となっていた為、今は宿にはいない。
エステルとジュディスは、ショッピングを楽しんでいて。
レイヴンは大人の遊びに飛びついている。
ラピードはフレン達と一緒についていき、カロルは自分にとって必要なアイテムを取りに行ってしまった。
ちなみに、ユーリは散歩に出ているらしく、今は居ない。
よって、今宿の部屋の中にいるのは、リタ一人のみだった。

「……」

そんなリタは、一人部屋で本を読んでいた。
その時だった。

（ガチャッ）

「お～い、誰かいるのか？」
「……」

誰かが部屋に入って来る。
しかし、リタはその人物の存在に気づかない。

リタは一度本を読み始めると、しばらくは周りの変化等に気づかないのだ。

「リタ……またか」

その人物は、呆れたようにそう呟くと、

「お～い、リタ」

リタの名前を読んでみる。
しゃがんでのことだったので、黒くて長い髪が揺れる。

「……」

しかし、リタは黙ったままだ。

「……ったく、しゃーねーな」

やがてその人物は、何かを決意したみたいだ。
一旦立ち上がり、そして。

（スッ）

「あっ！」

リタが読んでいる本を、取り上げた。

「ちょ、ちょっと、何するのよ！！……ってユーリ！？帰ってたの

？」
「ああ。今さっきな。お前、呼んでもまったく返事ねぇんだから」
「当たり前じゃない！本読んでるんだから」
「いや、それを当り前と言われてもな……」
ユーリや他の人物からしてみれば、迷惑以外の何ものでもないのだが。
「それより、あたしの本を返しなさいよ！！」
「やなこった。この本返すと、お前がまた自分の世界に旅立つから」
ユーリの言っていることは最もなので、何も言い返せない様子のリタ。
そんなリタに、ユーリは言った。
「それにしてもお前は……エステルとかと出かけたりしねぇのか？」
「……あたしには、エステルとジュディスと買い物に行く理由なんてないから」
「あ～そうかい……」
リタは、そっぽを向きながら、そう答える。
見かねたユーリは、
「本当の所、実は行きたいんだけど、自分の性格上それが叶わないってか？」
「……」
黙りこんでしまうリタ。
図星だ、とユーリは確信を得た。

「はぁ……」
「何で溜め息つくのよ」
「別に……困ったお姫様が、ここにもいたんだなと思っただけさ」
「はぁ！？」

ユーリが溜め息をつきながらそう言うと、リタは大層驚いたように言った。

「どうでもいいや……とりあえず、今度からはそうしてくれよ」
「で、出来たら苦労しないわよ！」
「……ま、それもそうかもな」

顔を真っ赤にして抗議するリタを見て、ユーリは勝手に納得をした。

「なら、一つだけ解決策があるぞ？」
「な、何よ？」

疑問の声を投げ掛けるリタに対して、ユーリは言った。

「お前自身が、素直になればいいんだよ」

素直になれない少女　後編

「は、はぁ！？あたしが、素直になる？！」
「そう。そうすれば万事解決ってわけだ」
「で、出来るわけないでしょ！！」

そりゃそうだ、とユーリは納得する。
人間そんな簡単に変われるのなら、苦労はしないのだ。

「ま、少しずつでいいんだよ。だから、とりあえず自分の気持ちを伝えるようにしていけば
いいんじゃねえか？」
「……出来ないわよ、そんなの」

段々と声が小さくなっていく。
ユーリはそこで。

「んじゃ、今練習してみっか？」
「え？」
「今から何分か、俺の前だけで素直になってみるんだ。自分の思ってることを口にするなり、　何したって構わない。リタが思う、『素直な自分』ってやつを見せてくれ」
「え？ちょ……」
「それじゃあ、今からスタートな」

（パンッ）

リタの意見を聞かずに、ユーリはさっさと始めてしまう。
こうして、『リタ・モルディオ　素直化作戦』（今つけた）は、開始された。

「んじゃリタ、もう一度尋ねるぜ……お前は、エステル達と一緒に、買い物に行きたいか？」
「……うん」

顔を赤くして、上目遣いでリタは言った。

「……これは少し、やべぇな」

聞こえないほど小さな声で、ユーリは呟く。
しかし、作戦はまだ始まったばかりなので、とりあえずユーリは次の言葉を続ける。

「んじゃリタ。この調子で自分の思ってることをカミングアウトしてみるか」
「……」
「どうした？リタ」

言葉が途切れてしまうリタ。
何か異変でも起きたのだろうかと、ユーリは気になる。
なので、しゃがみこんで下から顔を覗き込んでみる。

「ちょ、ちょっと！！」
「おい、戻ってるぞ」
「も、元々はあんたがやらせたことでしょ！」
「まだ終わりって言ってないっての。だから、『素直な少女』を貫けよ」

「う……」

渋々従ったのか、リタは黙りこむ。
本来なら、殴るなりファイアボールを撃つなりしたい所だが、ユーリにやっても無駄だと言うことは理解しているので、やらないことにしていたりする。
それ以前に、リタ本人が、ユーリにそういった行動をするのに抵抗を感じてたりもする。

「それじゃあリタ。例えばこう……」
「……あたし」
「……ん？何だ？」

小さな声で、リタは言う。

「あたし、実はね……」
「……どうした？」

その先を聞こうと、ユーリは尋ねる。
だが、リタはなかなか言いだせずにいた。

「あたし……あたし……」

そして、リタがその言葉を口にしようとしたその時。

（バン！！）

「！？」

突然、扉があけ放たれる。
そこから入って来たのは。

「よ～し！これで明日の戦闘の準備は完了っと！……って、どうしたの？二人とも」

入って来たのは、たくさんの荷物をカバンに入れた、カロルであった。

「……アンタね」
「あ～あ、カロル先生、ドンマイ」
「え？ユーリ……僕、何かした？」
「いや、お前は何もしてない。ただ、タイミングがな……」

リタが何を言いたかったのかはユーリ自身は知らなかった。
しかし、カロルの入って来たタイミングと言うのが悪かったことは、理解することができた。

「アンタね……少しは空気読むとか考えなさいよ！！」
「ええ！？何で僕がそんな目に……って、ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

（ボンッ！）

カロルは、リタの放ったファイアボールをまともに受けてしまい、ノックアウト。
その様子を、ユーリは呆れた顔をしながら眺めていた。

「……ハァ」

リタは、窓より外を眺めながら、溜め息をついた。

「あたし……何やってたんだろうな」

先ほどまでの自分の行動を思い返して見て、リタは呟く。

「……！！」

（ブンブン！）

そして瞬時に、首を振る。

その顔は、赤く染まっていた。

「どうしてあたしが、あんな恥ずかしいこと言わなきゃならないのよ！べ、別にあたしは……」

そこまで呟いて、リタは黙りこんでしまう。

「……今度、エステルと一緒に買い物でも行ってみようかな。それにいつか……」

とある決意を心に秘めた、リタなのだった。

素直になれない少女　後編（後書き）

おまけスキット

カ「ねぇユーリ」

ユ「何だ？」

カ「結局僕って、出た意味あったの？」

レ「そりゃああったでしょ。やられ役として」

カ「ひ、ひどいよレイヴン！！」

ユ「……」

と言うわけで、「素直になれない少女」の話は終わりです。
次回は、「日常会話」と題したスキット集をやります。

日常会話　前編

『みんなについて』

ジ「ところでみんな。この暇な時間を利用して、みんなについて語ってみるのはどうかしら？」
レ「お、いいね。おっさんは乗っちゃうよ」
リ「は？何よいきなり？」
ユ「つまり、俺達に暇つぶしを手伝えってことだろ」
ジ「あら。ストレートに言ってくるじゃない？」
カ「でも、面白そうだね。僕も混ぜてよ」
ラ「ワオ～ン！！」
ユ「ラピードもやりたいのか……なら、俺もやってみっか」
パ「それなら、うちも参加してみたいのじゃ～」
エ「私も入らせてください。なんだか、面白そうです」
フ「エステリーゼ様が加わるのでしたら、僕も……」
ユ「そう言うわけで、全員参加な」
リ「あ、あたしはまだやるって言ってないでしょ！」
ユ「強制参加だ」

『お題：ユーリ』

ジ「最初はもちろん、ユーリからよね」
ユ「俺からか……ま、お手柔らかに頼むぜ」
カ「ユーリって、頼りになるお兄さんって感じがするよね！」
リ「そう？憎たらしいことを言う奴って感じがするけど」

ユ「……お前、実はまだ前のこと恨んでるだろ？」
リ「さぁどうだかね」
エ「リタ……」
レ「おっさんは青年は自由な男って感じがするわね」
ジ「あら。私もそう思ったわ」
レ「それは奇遇ね～」
パ「うちは、ユーリはたくましく見えるのじゃ」
エ「私もそう思います」
ユ「マイナスイメージ植え付けられてるのは、リタだけか」

『お題：エステル』

ユ「言うまでもなく、お姫様だよな」
ジ「そうね」
レ「おっさん的には、『か弱い』がつきそうだけどね」
ジ「そうね……それに、『おてんば』もつきそうね」
カ「あ～分かるかもしれない」
フ「そ、そんなことはないですよ！エステリーゼ様がおてんばなんて……」
ユ「内心お前も思ってんじゃねぇのか？」
エ「そうなんです？」
フ「い、いえ、決してそんなことは……」
リ「あ、あたしは……エステルは大切な友達だから」
レ「デレリタが出たわね」
リ「……ふん！！」
レ「げほっ！」
パ「……口は災いのもと、じゃな」

『お題：カロル』

ユ「お題がカロルと言うことで、こんなゲストを呼んでみた」
カ「え？ゲスト？」
ナ「……」
カ「……え？ナン？今は魔狩りの剣にいるんじゃ……」
ナ「呼ばれたからわざわざ来たのよ……で、これは何の集まりなの？」
レ「これから、少年の印象を聞こうかなと思ってた所なのよ」
ナ「カロルの印象？……弱虫ね」
カ「ひ、ひどいよ！！」
リ「あ～それあたしも同感。もう少し強ければ、足手まといにはならずに済むのに」
カ「強くなってその程度！？」
ジ「あら、カロルは十分強いわよ？……心は、ね」
ユ「フォローになってんのか？それ」

『お題：レイヴン』

一同「……胡散臭い」
レ「ちょっ……全員揃ってそれはないっしょ！！」
カ「だって……それ以外にレイヴンを表すいい表現が見つからないんだもの」
エ「ええ……私もそう思います」
リ「そうね。おっさんは胡散臭くないと、おっさんじゃないわよ」
レ「……それ、フォローしてるつもり？」

リ「え？全然そんな気はないわよ？」
レ「……グスッ」
ジ「八方塞がりね」
レ「ちくしょー！おっさんぐれちゃうぞ！！」
ユ「勝手にぐれてろよ。それで黙っててくれた方が、こっちは清々するからな」
レ「……あら？」

『お題：ジュディス』

ユ「次はジュディか……」
パ「ジュディ姐は言うまでもなく、セクシーな女性なのじゃ」
レ「そうね。ジュディスちゃんを表現する言葉は、それ以外ないわね」
リ「……悔しいけど、認めるしかないわね」
エ「私もジュディスぐらいあれば……」
ジ「あら、あなただって結構あるわよ？」
エ「フォローになってないです……」
パ「さすがは2兆点の点数を貰っただけはあるのじゃ！」
フ「ああ……そんなこともあったね」
ユ「なぁリタ。あん時はフレンに天誅下してたけどよ、あの点数つけたの、おっさんだぞ？」
レ「な、何を言っているのかしら？青年は……」
リ「……覚悟」
レ「ちょ……さっき殴られたばかり……って、こんな所でファイアボールはやめてー！！」

日常会話　前編（後書き）

スキット風の会話なのに、まさかの前・後編の2分割。
ネタが思い浮かばなかったわけじゃないですよ？

日常会話　後編

『お題：リタ』

ユ「次はリタだな」
リ「あ、あたし？」
エ「リタは可愛い女の子です」
ジ「そうね。ちょっと恥ずかしがり屋な部分もあるわね」
リ「だ、誰が恥ずかしがりやよ！！」
パ「そうなのじゃ。リタ姐は自分の気持ちに素直にならないことがたまにあるのじゃ」
リ「なっ……！！」
カ「そうかな？リタってすぐに暴力に走ると思うんだけど……」
レ「あ～それおっさんも賛成～」
リ「……覚悟！！」
カ・レ「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」」
フ「……少しは学びましょうよ、レイヴンさんに、カロル」

『お題：フレン』

ユ「堅いな」
リ「堅いわね」
レ「堅いね」
カ「堅いよね」
フ「四人揃ってそんな意見……」

エ「で、でも真面目でとてもいい人ですよ？」
フ「え、エステリーゼ様……」
パ「……二人だけの世界に入って行ったが、いいのかのう？」
カ「いいと思うよ……しばらくの間ほっといても」

『お題：ラピード』

ユ「と言うわけで、次はラピードだ」
ラ「ワオーン！！」
ユ「かかって来いってさ」
カ「ところで、ラピードって何歳なの？」
フ「確か、六歳だった気がするよ……」
ユ「人間でいえば三十代だな」
リ「……おっさんとは全然違うのね」
レ「何でおっさん見ながら言うかな！！」
パ「おっさんと違って、ラピードは役立つのじゃ」
ラ「ワン！」
パ「こら、くすぐったいのじゃ！」
エ「パティ……羨ましいです」
ジ「あら、パティに嫉妬してるのかしら？」
エ「い、いえ、そんなんじゃ……」
カ「何だろう、どこかラピードって……カッコイイ所があるんだよね」
レ「……おっさん、地味にショック」
フ「大変ですね……レイヴンさん」

『お題：パティ』

ユ「と、これで最後か？最後は……」
パ「うちなのじゃ」
カ「パティか……」
リ「何というか、神出鬼没よね」
レ「どこから出てくるのか分からないって感じよね」
ジ「けど、一途な子でもあるわね」
ユ「……何で俺の方見ながら言うんだよ」
エ「……何か、複雑です」
リ「そう？すぐに冷めると思うわよ、そんなの」
ジ「どうかしらね？」
ラ「ワン！」
ユ「ま、とにかく一言言うことがあるとすれば……いろいろと迷惑運んでくる奴ってことだな」
パ「何のことなのじゃ？」
レ「本人自覚なしね」
ユ「一番太刀悪いパターンじゃねぇか」

日常会話　後編（後書き）

スキット、終了です。
微妙に消化不良な点もありますけど……気にしない気にしない♪（おい）。
さてさて次回は……カロルとナン主演の、『とある日の遭遇』というお話です。
……いきなりカロナン小説書くなんて、私、とっても勇気あるな……。

とある日の遭遇　？（前書き）

何話区切りになるか分かりませんので、今回は数字で参りたいと思います。

とある日の遭遇　？

それは、旅をしているユーリ一行の、その途中での話だった。
戦闘の準備をしに、カロルは一人でお店に来ていた。
他のメンバーは、買い物当番であったり、趣味で買い物に行ったり。
宿に残っていたり、大人の遊びに飛び込んだり……と、みな自由に行動していた。
そんな中、カロルのみが、戦闘に備えて道具を買ったりしていた。
……最も、その大半がカロルが使用するだけで終わるのだが。

「……ふぅ。これで明日の戦闘の準備は完了っと」

『明日の』と言っている辺り、何か怪しい物を感じなくもない。

「それにしても、ここの街は本当におかしいよね……何で街の中だというのに結界がないんだろう」

カロルは、それが気になって仕方がなかったらしい。
それぞれの建物の周りには、魔物が入ってこれないように結界が張られている。
だが、この街全体には、それらしき物は張られていないのだ。

「普通、結界を張るなら、街全体にかけた方が効率的で楽なはずなんだけど……」

呟く。
その呟きは、もし目の前に魔物が現れたらどうしようという不安の現れでもあった。

「さて、それじゃあ僕もユーリ達の所へ……」
と、そのときだった。
（ドシン！！）
「……へ？」
背後を見る。
するとそこには。
「ま、魔物！？あんなの僕の図鑑にも載ってないよ！？」
カロルは、自作のモンスター図鑑にも載ってないような魔物が登場したことに、かなりの驚きを見せていた。
それもそのはずで、それは自分のモンスター図鑑が未完成だと言うことに繋がるからだ。
「周りには僕一人……こうなったら、僕だけでやるしかない！！」
自分の得物を準備して、魔物と対峙する。
「グルル……」
魔物は、カロルのことを見て、唸っていた。
「う……」
「……」

早速怖気ついてるカロル。
心なしか、武器を持つ手が震えている。
「僕だって……強くなるんだ！！だから……」
「ガァァァァァァァァァァァァ！！」
「ヒャァァァァァァァァァァァァァァ！！」

（ダッ！）

決意表明を見せた所での、速攻の決意陥落。
それでいいのだろうか、カロル……。

「ぼ、僕だけじゃこの魔物倒すのは無理だよ！！いくらなんでもでかすぎるって！！」

気持ちは分かるが、とりあえず頑張ることくらいはしてみろよ……。

「そんなこと言ったって！！」
「さっきから、逃げながら誰と話してるのよ？」
「え？」

（シュタッ）

魔物とカロルの間に飛び降りた、謎の人物。
そして、その人物は。

「ハァッ！」

（ザシュッ）

回転しながら、魔物の体を切り刻む。
そして、魔物はそのまま光となって消えていった。

「ど、どうしてここに……？」
「何驚いたような顔してるのよ？それに、あのくらいの魔物で逃げたりして、相変わらずアンタの
逃げ癖は治ってないようね」
「そ、そんなことないさ！ナン！！」

そこにいたのは、カロルの前のギルドにいた少女――――ナンだった。

とある日の遭遇　？

「それよりもカロル。あんたこそこんな所でどうしたのよ？」

ナンが、カロルにそう尋ねる。

「何でって……旅の途中だよ。ナンこそどうしてここにいるのさ？」

「私？私は魔狩りの剣の仕事で、しばらくの間ここの魔物退治やってるのよ」

面倒臭そうに、ナンは説明する。

カロルは、そんなナンの様子を見て、何処か安心していた。

「いつ頃までここにいるのよ？」

ナンがカロルにそう尋ねる。

するとカロルは、

「明日か明後日にはこの街を出る予定だよ。ここに長居するわけにもいかないからね」

「そう……」

それきり、ナンは黙り込んでしまった。

「……どうしたの？ナン。いきなりそんなことを尋ねたりして」

「べ、別に私は、単にあんたがどのくらいいるのかを気にしただけよ。別に他意はないわ」

「そ、そう？」

一旦会話が途切れる。
カロルとナンの間に、静寂の時間が流れる。
最初にそれを破ったのは、
「ねぇカロル」
ナンだった。
「どうしたの？ナン」
「何でさっき逃げようとしたのよ？」
「……」
カロルは答えない。
「答えたくないの？そうやってまた、逃げようとしたりして……」
「……戦おうとは思ったさ。けど、でかすぎて……」
「結局は怖くて逃げ出しただけじゃない！全然成長してないわねカロルったら！！」
一気にナンは、カロルに向かってそう言った。
そんな様子を見て、カロルは一瞬驚きながらも、何故か笑顔になっていた。
「……何でそんなに笑顔なのよ？」
「え？そ、そうかな？僕、笑ってる？」
自分でも気付いていなかったのか、カロルはそのことをナンに尋ねた。
「ええ。嬉しそうな顔をしてるわ。もしかして……マゾ？」

「違うからね！」
ナンからの思わぬ一言に、カロルは突っ込まずにはいられなかった。
「ところでカロル……」
「な、何？ナン」
ナンが突然自分の名前を呼んできたので、カロルは少し驚きを見せる。
だがしかし、すぐにそんな暇はないことを悟る羽目になる。
何故なら。
「……いつの間にか私達、囲まれてるわね」
「……え？」
これには、心底驚かないわけにはいかなかった。
ナンに言われて周りを見回すと、
「……何、これ？」
魔物の群れが、カロル達の周りに出来上がっていた。
「……カロル、やるしかないわよ」
「……うん」
ナンの言葉に、カロルは頷く。
「逃げる気でしょ？」
「……そんなことないよ！」
「本当に？」

「本当だよ！」
「さっきは逃げようとしたくせに？」
「う……」
見られていたことを忘れていたカロル。
「あ、あれは魔物があまりにも大きかったからで……今回は数が多いだけだから大丈夫だって！」
「本当かしら？」
疑いの眼差しを向けるナン。
「い、今はこんなことをしてる場合じゃないよ！早く魔物を倒さなきゃ！」
珍しくカロルがナンにそう指摘する。
「言われなくても分かってるわよ！」
ナンはその言葉に答えた。
そして二人は魔物に対峙し、
「行くわよカロル！」
「うん！」
魔物たちの群れに飛び込んだ。

とある日の遭遇　？

「ハァハァ……」
「ゼェゼェ……」

さすがに数が多すぎた。
すべてを片付け終えた時、二人はすでに肩で息をしている程に疲れていた。

「……どうしたのよ、カロル？息あがってるじゃない……ハァハァ」
「ゼェゼェ……ナンの方こそ……ゼェゼェ」

互いにそんなことを言ってはいるが、やはり互いの息があがっていることに変わりはない。

「ま、まぁ、それじゃあ僕はこれで……」
「そうね。それがいいわね。私もアンタと長くいる気は……」
「危ない！ナン！！」
「ない……って、え？」

（ガッ！）

「ギャッ！」

その時。
まだ生きていた（というより、隠れていた）魔物が一体、何のことを襲ってきた。

それを感知したカロルは、魔物とナンの間に割ってはいる。
すなわち、自らの身を犠牲にして、ナンを守ったのだ。

「あ、アンタ……私のことを、守る為に……」
「な、ナン……逃げて」

カロルは、今にも枯れそうな声でナンにそう告げる。
腹をやられたのか、今のカロルには動ける元気がないらしい。
つまり、自分を連れて逃げることは不可能、と認識したのだ。
もちろん戦って勝てばいいだけのことなのだが……いかんせんその魔物というのが強い。
戦闘慣れしているナンでも気づかなかったのだ。
相当の魔物に違いない。

「……くっ」

悔しいが、ナンにもそのことが分かっていた。
自分一人で立ち向かった所で、この魔物に勝てるわけがない。
だが、それでも戦わないわけにはいかなかった。
何故なら。

「……いつも逃げてばっかりだったカロルが、私のことを助けた？」

……理由はその一つ。
カロルが自分のことを守ってくれたからだ。
本当に、それだけの理由だった。
ただ、カロルが自分のことを守ってくれたのが、嬉しかったのだ。

「……なら、私がすべきことは」

決意を秘めたように、ナンは武器を構える。
先ほどまでの戦いに疲れてはいるが。
それでも、戦わずにはいられない。
何故なら。

「……ここで逃げてたら、私がいつもカロルに言ってることが、守れないから」

いつも自分はカロルに『逃げるな』と言っていた。
なのに、自分がこの場に遭遇して逃げるなど、言語道断だと考えていた。
だからナンは、今この場で魔物と対峙する。

「……ナン？」

苦しそうな声で、カロルはナンの名前を呟いた。

「……カロル。一つだけ言っとくわ」
「え？」
「今から私は、この魔物を倒す。その前に死んだら、一生カロルを恨むわよ？」
「え？……う、うん」

その言葉を聞いて安心したナンは、もう一度魔物の方を見る。
そして、

「よくもカロルを傷つけてくれたわね……この魔物め！！」

ナンは、魔物に向かって走って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0586i/

Tales of Vesperia　短編集

2010年10月9日21時17分発行